ロシアの北／北のロシア[1]

望月哲男

１．二つの北

ロシアは北国というのは国際的な定型イメージであるが、そのロシアの内側にも「北」と呼ばれる一定の地域がある。もちろん国土に東西南北があるのは当然だが、文化論や地政学における方位意識は歴史的に形成されたものだけに、単なる自然地理的な方位感覚にはおさまらない偏りや複雑さを持っている[2]。

ロシアの「北」は端的に言って二通りある。ひとつはユーラシア大陸に広がるロシア連邦の北域一帯を示す概念であり、もうひとつはロシアの欧州部分（ヨーロッパ・ロシア）の北部を限定的に示す。前者は一般に地理的かつ行政的ニュアンスを持った「ロシア（国家の）北部」（Sever Rossii）とか「北部諸地域」（Severnye regiony）といった名で呼ばれ、特に緯度の高い地域は「極北」（Krainii Sever）という別称をもつ。これに対して、後者はしばしば民族文化的なニュアンスのこもった「ロシアの北」（Russkii Sever）という名で呼ばれる。単に大文字の「北」（Sever）がこの地域を示すことも多い。

前者の「北」が、中世のモスクワ大公国以来シベリア・極東に向けて拡大してきたユーラシアの多民族国家ロシアの地政学的感覚に基づいているのに対して、後者の「北」は、そもそもウラル山脈以西の空間で形成されたロシア人のアイデンティティと結びついた、伝統主義的な色合いを含んだ概念である。いずれの「北」もそれぞれの可能性と問題を擁して現代という時代に直面しているが、以下では主として後者の「北」の歴史や文化的イメージを概観しながら、ロシアにとっての北方の意味を考えてみたい。

なお二つの「北」を弁別する方便として、本稿では前者を「ロシア北部」後者を「北ロシア」と呼ぶことにする。

２．北ロシア ――自然と歴史

北ロシアとここで呼ぶヨーロッパ・ロシアの北部地域は、地理的・行政的に明確な境界を持つわけではない。大雑把な了解で、白海に注ぐ北ドヴィナ川、オネガ川、ヴイグ川などの流域を中心とし、モスクワ北方を東西に流れるヴォルガ川流域が南限。より限定的にはモスクワの北約４００キロほどにある都市ヴォログダあたりを「北」への入り口とする。西はオネガ湖やノヴゴロドあたり、東ははるかウラルの麓まで含めることができる。北辺はもちろん海岸と島々だが、白海・バレンツ海に面したこの一帯は古来ポモーリエ（海辺の土地）と呼ばれ、ロシア国家が黒海やバルト海岸そして太平洋岸に安定した地歩を築くまで、唯一の自前の海への出口だった。内陸部分はラドガ湖、オネガ湖などの湖沼群と大

---

[1] 本稿は科学研究費研究『文明としての「北方」 ――異文化共存の可能性』〔基盤（B）（平成 12-14）代表：梶原景昭〕の成果の一部である。執筆に際しては、原暉之（北海道大学スラブ研究センター）、塚崎今日子（札幌大学外国語学部）の両氏から貴重な助言を得た。

[2] これはたとえば赤坂憲雄『東西／南北考』（岩波新書、2001）のテーマである。

小の河川、豊かな森林を擁し、白夜の夏と長い冬という、いわゆる北方的自然の地である。中心部分は緯度にしておよそ北緯６０度と６５度の間にある[3]。

本来フィン・ウゴル系およびバルト系諸族の居住地であったと見られるこの地にロシア人が住み着くようになった経緯には、ロシア人の起源についてと同じく諸説がある。一説にはバルト海南岸にいたヴェネドというスラブ系種族が東進し、南下したという。またカルパティアの東スラブ人が北進したという説も存在している。いずれにせよおそらく６・７世紀にはこの地域にロシア人の祖先が住み着き、長い時間をかけてアイデンティティ形成をしたと推測される。

「北ロシア」が歴史の前面に出るのは１２世紀のこと。南のドニエプル川流域に起こった最初のロシア国家キエフ・ルーシがこの頃没落したのにかわって、イリメニ湖とヴォルホフ河を擁した都市国家で東西南北の交通の要衝だったノヴゴロド(北緯 58.31 度, 東経 31.17 度)が「北」の代表として立ち、１３世紀をピークとして栄えた。中世議会制政治のモデルとしても興味深いノヴゴロドは経済的にも繁栄し、「北ロシア」はこのノヴゴロドや西南のロストフからの植民によって発展していく。この地域の産物である毛皮、蜂蜜、蝋、塩、金属などが、白海の港アルハンゲリスクとノヴゴロドやヴォログダなど内陸水路の要衝を経て、外国とロシア各地に運ばれたのである。１３世紀からの「タタール＝モンゴルのくびき」（後出）もこの地には及ばなかった。

政治の中心がモスクワ(北緯 55.45 度, 東経 37.34 度)に移る１４世紀以降には、修道士や農民たちの入植も盛んになった。元モスクワ公国の貴族だったキリールは１４世紀末にヴォログダの地シーヴェル湖畔で穴居をはじめ、キリーロフ修道院の元を開いた。白海に浮かぶソロヴェツキー群島の有名な修道院群は１５世紀前半にサヴァーチーとゲルマンという二人の僧によって建設され、聖地としてのみでなく製塩や漁業によっても栄えた。現在博物館の名を冠されているオネガ湖のキジ島にあるいくつかの木造建築物群（１８世紀に建造）も、往時の「北ロシア」の文化的洗練を雄弁に物語るものである。北ロシアの経済はイワン雷帝治下(1547-84)の１６世紀中期にイギリスとロシアの交易が始まることでますます活性化した。北ドヴィナ水系のヴォログダ川に面し、アルハンゲリスクとモスクワを結ぶ河川交通の要衝であるヴォログダには英国商会の倉庫が作られ、イワン雷帝もここを造船の基地としたのだった。

このような北ロシアの繁栄は、大改革者ピョートル大帝（在位 1682-1725）が１８世紀初めにバルト海に注ぐネヴァ川の河口にサンクト・ペテルブルグ(北緯 59.58 度, 東経 30.18 度)を建設し、モスクワに代わる新しい首都とするまで続いた。スウェーデンと戦って北方での覇権を確立しようとしていたこの皇帝は、このとき白海からバルト海へと陸路ロシアの船団を移動させ、その跡が皇帝道路（Osudareva doroga）として残っている。軍事・政治のみでなく経済の中心も新首都に移そうとしたピョートルは、強引な外国船誘致策によってペテルブルグの国際港化を促したので、その治世の終わりには白海のアルハンゲリスクとの貿易上の地位が逆転、１８世紀中葉にはペテルブルグがロシアの貿易の半分を扱う

[3] 主な都市等では、ヴォログダ(北緯 59.12 度,東経 39.55 度)、ヴェリーキー・ウスチューグ(北緯 60.48 度,東経 46.18 度)、ペトロザヴォーツク(北緯 61.47 度,東経 34.20 度)、アルハンゲリスク(北緯 64.32 度,東経 40.40 度) 、ソロヴェツキー群島(北緯 65.05 度,東経 35.35 度)、バレンツ海岸のムルマンスク(北緯 68.58 度,東経 33.03 度)。

ようになった。

そもそも北緯６０度の沼地に膨大な力を投入して建設されたこの都市は、それ自体が近代の奇跡のようにみなされ、世界の美都の北方版を意味する一連の詩的形容が捧げられた。例えば「北のパルミラ（古代シリアの都）」「北のベニス」「北のローマ」など。ピョートルの遷都は、まずこの南北軸にそった移動として意識される。つまり彼は、様々な既得権を持った保守的な大貴族たちの巣である北緯５５度の内陸モスクワから、より北の海港都市へと政治の中心を移すことで、北方の覇権を築くとともに政治改革の環境を整えようとしたのだ。だがこれと同時に、彼の遷都は東西のベクトルにおいても重要な意味を持っていた。すなわち彼は東経４０度のアルハンゲリスクから東経３０度のペテルブルグへと、軍事と交易の基地を移した。西側から見てスカンジナビアの彼方にあたるアジアの地から、直接ヨーロッパの岸を洗うバルト海に出ることで、「ヨーロッパ国家ロシア」のプレゼンスを示そうとしたのである。

この移動は北ロシアの経済に大きく影響した。すなわちペテルブルグからは黒海やモスクワに通ずる独自の内陸水路が開けているので、これ以後、モノ・人・情報の流れが、北ロシアの中心をなす水系から外れていったのである。

帝政後期からソ連期にかけて、北ロシア経済・文化圏のトータルなアイデンティティは失われていき、首都の後背地としての個別的開発史が残った。ピョートル大帝自身が作ったオネガ湖畔の町ペトロザヴォーツクは機械工業都市・研究都市として栄え、バレンツ海のムルマンスクは、暖流のおかげで凍らない港として開発されて、２０世紀には北極圏内の最大都市に成長した。またスターリン時代には、ピョートル大帝の離れ業の再現のような全長２２７キロの「白海・バルト海運河」[4]によるこの地域の再開発が行われた。そしてそうした開発地の周辺には点々と「収容所群島」が形成された[5]。世界の変容のシンボルといわれたソロヴェツキー群島の修道院も、政治犯の収容所として有名になった[6]。だがこうした「開発」は主としてこの地域の北西辺をかすめるものにすぎず、森と水の「北ロシア」中心部は、１８世紀以来の「巡礼たちの通い路」「僻遠の地」の印象を保っていた。そのような「文明」や「近代」からの距離が、逆にこの地域の独自の文化をはぐくむことになったのである。

ロシア史における「北ロシア」の特徴は、普通以下の３点で説明される。

１）　１３世紀から１５世紀後半にかけてモンゴルとチュルク系民族がロシアの広い地域を支配したいわゆる「タタール＝モンゴルのくびき」の時代、「北ロシア」はその支配をまぬかれていた。すなわちこの地域にはアジア的文化の影響を受ける以前のスラブ＝ロシア文化の伝統が保存された。

２）　１９世紀に至るまでロシア各地で見られた「農奴制」がこの地域にはほとんど存在しなかった。アルハンゲリスクやカレリアにはそもそもその制度がなかったし、ヴォログダなどでは、人頭税はあっても地主に対する無料奉仕としての

---

[4] １９３３年完成。囚人労働でも有名な一大工事だった。

[5] ジャーナリスト丸山政男はスターリン時代に単身でこの地を訪れ、保安関係者や流刑囚たちとの接触のエピソードを含む興味深い紀行を書いている。丸山政男「コラ半島紀行」『世界紀行文学全集 10　ロシア・ソヴェート編』（修道社、1960）

[6] 内田義雄『聖地ソロフキの悲劇』(NHK 出版、2001)参照。

賦役義務はなかった。

3）　１７世紀中葉の総主教ニーコンによる典礼改革に反対して異端を宣告されたいわゆる「分離派」もしくは「古儀式派」の多くが、「北ロシア」に立てこもった。代表的な例はニーコンをアンチ・キリストとみたソロヴェツキー修道院の３５０人の修道士たちで、異端を反逆とみなす政府軍に対抗して８年間籠城したあげく、１６７６年にほぼ全滅した。１６８７年のオネガ湖のパレオストロフスキー修道院では、２７００人の修道士や農民が焼身自殺している。このような「殉教」の記憶とともに、北ロシア一帯には２０世紀に至るまで、分離派信徒たちの「隠れ里」が点在していた。

以上のような要素は、「北ロシア」に「古き良き文化伝統の貯蔵庫」、「権力にこびない自立的風土」のイメージを与えている。事実、この地にも広がった分離派のうち最も過激な「逃亡派」（遍歴派）は、国家権力を認めぬゆえにパスポート、税金、徴兵、人口調査を拒否し、貨幣をも認めようとしなかった。ピョートル大帝のロシアは、貴族階級に「官等表」に沿った国家勤務を義務づけ、人口調査をして人頭税を課し、宗務院によって教会を掌握するなど、諸方面での一元的管理を目指した国であったが、その北の首都のすぐ東側には、広大なカオスが口を開いていたのである。

３　民俗への旅

北ロシアの伝統文化は、建築、工芸、衣装などのモノ文化、食文化、農や狩猟・漁労などの生業を中心にした一年の生活カレンダー、その背後にある自然観や神話的世界観、それを物語る口承文芸（昔話、英雄叙事詩、民謡、儀礼歌・・・・・・）などの総体として存在する。自らヴォログダの農村出身である現代作家ワシーリー・ベローフは、この地の農民の生活サイクルを司る精神を「和」とか「リズム」といった概念で説明している[7]。また今日のフォークロア研究は、北ロシアの口承文芸がロシア人到来以前、キリスト教到来以前、キリスト教以後の３種類の異なった世界観層を含んでいることを解明している[8]。

このような複雑かつ繊細な民俗文化に初めて総合的な関心が向けられたのは、１９世紀中葉のことだった。ロマン主義以降の国民性への関心、「民衆」とその智慧、言葉、風習などの「発見」、近代化の過渡期における「農民問題」の重大化、情報メディアと交通の発達――ロシア・リアリズム文学の隆盛を促したのと同じこれらの要因が、ロシア知識人の目を北ロシアにも向けさせたのである。

坂内徳明は１９世紀後期の北ロシア・フォークロア研究がナロードニキ運動と共通の心性に支えられていたことを示唆しているが[9]、確かにこの時期の民俗研究は「知識人の良心」をうかがわせる人間的なドラマを含んでいる。北ロシア民俗学の創始者Ｐ．Ｎ．ルィブニ

---

[7] Vasilii Belov, *Lad: kniga ocherkov o narodnoi estetike*, Moscow, 1979-81; Vasilii Belov, *Povsednevnaia zhizn' russkogo severa*, Moscow, 2000.

[8] Cf. I.N.Beloborodova, "Dukhovnoe osvoenie severnorusskogo prostranstva: Etnokul'turnyi aspect formirovaniia sotsioprirodnykh system" http://folk.pomorsu.ru/Publication/book4/belobor.htm

[9] 坂内徳明「ニコライ・エヴゲーニエヴィチ・オンチュコーフ：ある「辺境の民俗学」」『一橋大学研究年報　人文科学研究』25(1986)、p.180。

コフ(1832-85)がその典型例で、モスクワの商家に生まれてモスクワ大学で文学を修めながら、彼は友人たちとともに「ロシア民衆の運命」を論じていた。やがてチェルニーゴフ県の民謡収集に行った際に分離派教徒の商人層と交流したという名目で逮捕され、１８５９年オネガ湖畔のペトロザヴォーツクに追放される。しかしその能力によって数年後には県政に参与する立場となり、行動の自由も得てアルハンゲリスクやヴォログダ県の境まで足を運び、総計３０人ほどの語り手から２００件ものブィリーナ（英雄叙事詩）の他、民話、歌謡、迷信などを聞き書きする。結果は１８６１年から６７年にかけて『ルィブニコフ収集による歌謡』として出版されたが、ペテルブルグのすぐ東で発掘されたこの資料は、ブィリーナを僻遠の地の遺物と信じていた首都の読者を驚かせた。ルィブニコフは地域民の生業の研究や図書館の普及にも尽力した後、６７年ポーランドのカリシュに副知事として派遣されている。

北ロシア・フォークロア研究はルィブニコフの情熱に応えるかのように短期間に進展する。２番目の主役Ａ．Ｆ．ギリフェルディング(1831-72)は、サンスクリット語とスラブ諸語の優れた専門家であると同時にボスニア領事を努め、『ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、古セルビア』『ポーランド問題』など歴史と現在の問題に深くコミットする著作もあるマルチ人間であった。帝立地理学協会の民俗学部門代表を務めていた１８６０年代末に、彼は上記ルィブニコフの著作の信憑性調査という名目でオロネツ県に入り、自ら３１８のブィリーナを収集した。４１才での若い死も、調査旅行中の客死であった。次のＥ．Ｖ．バールソフ(1836-1917)は歴史や中世ロシア文学の領域で多くの仕事を残した文献学者。ペトロザヴォーツクの神学校で論理や心理学を教えていた１８６０年代に、有名なオロネツの「泣き女」Ｉ．Ａ．フェドーソヴァと出会い、農民の哀歌を収集し始めた。７２年から８５年まで「葬送の歌」、「兵士の嘆き」、「婚姻の哀歌」の３部作で発表された『北の国の哀歌』は、文学界に大きな反響を呼んだ。

帝政末期からソ連期にかけて活動したＮ．Ｅ．オンチュコーフ(1872-1942)は豹変型の人物。カザンの看護学校を出て１８９０年代にペルミで医者の助手などをしていた彼は、世紀末におもむろにペテルブルグへ上京、１９００年夏のカマ川支流調査を皮切りに、１９０７年にかけて計６回、ペチョラ川、ポモーリエ、オロネツ、アルハンゲリスクと北ロシア各地を集中的に調査した。作家Ｍ．Ｍ．プリーシヴィン等の収集も加えて地理学協会の紀要に発表された『北ロシア昔話集』(1908)は、従来手薄だった昔話ジャンルの集成として同協会に表彰される。だが彼はこの年突然に故郷サラープルへと帰り、市会議員やジャーナリストとしての仕事を始める。彼が再び民俗学に戻るのは、シベリヤを転々としてから革命のリーダーの名に改称された元の首都レニングラードに戻った１９２４年であった。その生はスターリン時代の収容所で閉じられたと推測されている。

１９２０年代に滞在型民話採集で６３６話を記録して第二次大戦時の封鎖都市レニングラードで死んだアレクサンドル・ニキーフォロフ(1893-1941)を含め、北ロシア民俗学は、学問的興味、個人の情熱、そして運命の配剤のようなものが深く絡み合った世界であった[10]。

---

[10] 北ロシア民俗学の歴史は、ウラジーミル・プロップ（斉藤君子訳）『ロシア昔話』（せりか書房、1986）および前掲坂内徳明論文を参照。なお北ロシアは現代でも民俗学研究の対象となっており、1995、95、2000年には、日本人グループ（斉藤君子、渡辺節子、中川裕、熊野谷葉子、塚崎今日子）によるアルハンゲリスク州の調査も行われている。

４　文学的変奏

作家や芸術家たちも北ロシアに関心を寄せた。ロシア・モダニズム期に古代的な世界への窓を開いた二人の画家 ―歴史人物や昔話の主人公を装飾的な筆致で描いた画家 I.Ia.ビリービン(1876-1942)と東洋的モチーフで独自の境地を開いた N.K.リョーリヒ(1874-1947)―は、ともに１９００年代前半に北ロシア諸地域を調査旅行している。前者の『盛装したヴォログダの娘』(1905)や後者のロシア史シリーズ(1903-04)には、そうした体験が直に反映している。

しかし文芸の世界でもっとも北ロシアに魅せられた人物は、間違いなく M.M.プリーシヴィン(1873-1954)であろう。ロシア第１次革命後の１９０６年、ペテルブルグの片隅の陋屋で先述の北ロシア民俗学者オンチュコーフに出会ったとき、プリーシヴィンは３３才。新聞記者や編集者をしながら自分の小品を発表し始めたばかりだった。これ以前、彼は変革期のロシアで数々の挫折を経験していた。１２才で故郷エレツの中学校からアジアへの脱出を試みて捕まったのを皮切りに、１５才で同校を放校になり、リガの技術学校にいた９７年にはマルクス主義の活動で逮捕されて１年の禁固、ライプツィヒ大学で農業を学んでいた１９０２年には劇的な失恋を経験した。農業技師やジャーナリストの仕事をしながら、彼は（社会）革命から自己への回帰の道を模索していたが、これは「マルクス主義から観念論へ」という S.N.ブルガーコフなど当時の『道標』派の目指したものと重なっていた。オンチュコーフやアカデミー会員のシャーフマトフがこのとき勧めた北ロシア調査旅行は、プリーシヴィンにとってまさに「自己への旅」となったのである[11]。

プリーシヴィンはこのときラドガ、オネガの湖水を経て白海の手前のヴイグ湖に浮かぶ小島に到着、その特異な風土と人々の暮らしを約１カ月にわたって観察した。この旅から生まれた『愕かざる鳥たちの国で』(1907)[12]は、北の湖水地帯の風物や歴史に始まり、「泣き女」、漁師、フォークロアの語り手、猟人、呪術師、分離派信徒といった様々な人間の生活と考え方、表情や言葉を紹介している。この作品はまさに民俗学的スケッチと内省的散文の幸福な結婚の事例であり、以降のプリーシヴィンの特異な創作スタイルを決定づけることになった。この後、彼は次々と北ロシアの民俗紀行を行い、『魔法の丸パンを追って』(1908)、『見えざる町の城壁のもとで』(1909)[13]といった魅力的連作を生みだしていった。前者は白海のソロヴェツキー島からコラ半島を経てノルウェイのフィヨルド地帯に至る極北の旅行記。「日の照る夜」と題された前半部では、帝立地理学協会民俗学部門のわずかな支援を得て北ドヴィナ水系からアルハンゲリスクへ出た語り手が、北の海辺の漁師たちや巡礼たちとつきあいながら、白海の修道士たちの世界へと入っていく。後者の作品では、彼は旧夏至祭のイワン・クパーラの日に合わせてヴォルガ支流域のスヴェートロエ湖を訪れ、旧教徒の諸派や正統教会の僧たちの論争を聞いてその世界観に分け入りながら、かつて異教徒の手を逃れて湖底に隠れたという分離派のユートピア「キーテシ」の町のイメー

---

[11] プリーシヴィンの前半生については、太田正一「詩人の誕生」ミハイル・プリーシヴィン（太田正一訳）『巡礼ロシア：その異端のふところへ』（平凡社、1994）所収を参照。

[12] 邦訳：ミハイル・プリーシヴィン（太田正一訳）『森と水と日の照る夜：セーヴェル民俗紀行』（成文社、1996）

[13] 邦訳：『ソローフキ詣で：魔法の丸パンを追っかけて』『キーテジ：湖水の鐘の音』ミハイル・プリーシヴィン（太田正一訳）『巡礼ロシア：その異端のふところへ』所収。

ジを思い浮かべる。彼の作品においては北ロシアの風土、景観、文化的記憶、そして様々な人物像の作り出す特異な時空感覚が、歴史や社会あるいは自己と他者に関する近代的な思考の枠組みを問い直す機能を果たしている。しかもプリーシヴィンの柔軟で細やかな観察眼と語り口は、「泣き女」から聖職者や役人に至る様々な個人の人生の重みや智慧を伝えると同時に、彼らの振る舞いに含まれる俗っぽさや演技性も見逃していない。湖底に沈んだ「見えざる町」の姿を推測するのと同じように、見えるもの（風景や人間）の背後にある見えないもの（人々の心の世界）の像を、筆者は示してくれるのである。

「プリーシヴィンの人生は」と同じナチュラリストの作家コンスタンチン・パウストフスキー(1892-1968)は書いている。「それは人間が周囲から押しつけられた借り物を全部うち捨てて、ひたすら『心の命ずるままに』生き始めた例である」[14]彼によればプリーシヴィンの言語は民衆（ナロード）の言語であり、ロシアの人間が自然、仕事、そして素朴で賢い民衆の性格と緊密につきあったときに生まれてくる言葉である。プリーシヴィンの場合その体験をもたらしたのが北ロシア紀行であったというわけだ。

北ロシアとの接触が自己発見や自国文化との新しい出会いにつながり、ひいては言葉、文学の再発見になるというモチーフは、時代を超えて継続している。上出のパウストフスキー自身にも、行き詰まった作家が白夜のペトロザヴォーツクでナポレオン軍将校の数奇な運命を発掘することで創作欲を回復するという、影絵を思わせるような紀行風の短編『白夜』がある。抒情的作家ヴラジーミル・ソロウーヒンは「凍えるような大河のほとり／古い教会の廃墟に立てば／心の内に目を覚ます／どんな詩よりも貴重なものが・・・・・・」と歌った。ヴォログダを本拠地にする農村派作家ワシーリー・ベローフ(1932-)は、フィクションの世界のかたわらで、北ロシアの農民の生活リズムそのものを散文に写し取るような歳時記・生活スケッチ的創作の試みを深めている。

「北ロシア」という言葉は現代でもしばしば強い感嘆や思い入れ深い沈黙とともに発せられる[15]。中世ロシア文学史の泰斗ドミートリー・リハチョーフ(1906-99)は、１９２８年、学生サークル活動の故に逮捕されてソロヴェツキー島の収容所に送られ、白海＝バルト海運河の建設にも駆り出された経験を持つが、その彼は北ロシアについて次のように述べている。

「北ロシア！　かの地の魅力を、かの地への愛着を言葉で表すのは難しい。１３才の子供の頃はじめてバレンツ海、白海、北ドヴィナ川を旅してポモール[16]たちのもとに泊まり、素朴に堂々と生きる比類なく美しい人々を目にしたとき、私は完全に圧倒された。ここでこそ本当の生活ができる ――淡々と素朴に生きて、働きながらその労働から十分な満足を得るような、そんな暮らしができると思えたのだ！　なんと堅固な小型帆船で私は航行（ポモールたちなら「歩行」と言うところだ）させてもらったことか！かの地の漁や狩りがいかに魔法のように思えたことか・・・・・・！そしてその言葉の、歌の、お話しの、いかに独特だったことか・・・・・・！こうして６０年以上もたった今でも、私はあれ以上にすばらしい土

---

[14] Konstantin Paustovskii, “Mikhail Prishvin” // Konstantin Paustovskii, Sobranie sochinenii v 9 tomakh, tom 3, Moscow, 1982. p. 352-358.

[15] ロシア人にといっての北ロシアのイメージについては以下を参照：中村喜和『遠景のロシア：歴史と民俗の旅』（彩流社、1996）、木村浩『ロシアの美的世界』（新潮選書、1977）。

[16] 白海・バレンツ海岸ポモーリエのロシア系住民を指す。

地を見たことがないと誓うことができる。私は一生涯北ロシアに魅了されてしまったのだ。

肝心なのは、北ロシアがロシア人の心を動かさずにおかないのは、北ロシアそのものがロシア的だからということだ。北ロシアは単に心情的にロシア的なだけではない。それはロシア文化の中で優れた役割を果たしてきた故にロシア的なのだ。北ロシアはわれわれのために数々のものを忘却の淵から守ってくれた ――ロシアのヴィリーナを、ロシアの往時の習わしを、ロシアの木造建築を、ロシアの音楽文化を、ロシアの偉大な抒情的精神 ――その歌や詩――を、ロシアの労働伝統 ――農民の、職人の、船乗りの伝統 ――を」[17]

5　「北ロシア」から「ロシア北部」へ

リハチョーフの例のような北ロシア賛歌は、個人の郷愁に根ざした抒情的文化論としては十分理解と共感を呼ぶものだし、また「停滞した社会主義国家」から「野蛮な資本主義国家」へと転じた現代ロシアに何らかの救いやアイデンティティの核を与えるものとして貴重でもある。しかし同時に、このような発言に紛れもなく付随している民族文化論上の純血主義や選別主義が、現代人をいささか鼻白らませることも確かだ。北ロシアはロシア人だけのための空間であり、ロシア文化のアイデンティティはもっぱら北ロシアにしかないのだろうか？さらに言えば、北ロシアを郷愁の中に閉じこめるこのような「外部」の「観察者」の視線は、この地域自身の現代という時空への適応の問題とすれ違っているのではないか？

じっさいの北ロシアは多様な方向にイメージ展開している。アルハンゲリスクでは国際的に有名なジャズ・フェスティヴァルが開催され、ヴォログダ近辺には富裕な「新ロシア人」たちの高級住宅地域が出現し、「ヴェリーキー・ウスチューグ市はサンタクロースのふるさと」といったキャンペーンも始まっている。

こうした外と内の視線、過去と現在の論理が交錯するところで、目下北ロシアを包み込む様々なプロジェクトが試行されている。ひとつの例は「オープン・ソサイアティー・インスティチュート」による地域プログラム「北ロシア」。これは北ロシアの文化的インフラ整備や少数民族の文化支援の目的で、１９９８年に国際ソーロス基金と地元カレリア共和国政府の共同で立ち上げられたもの。初年にはメインプロジェクトとして、オネガ湖のキジ島に大工文化継承発展のためのセンターを作るなど、「キジ地域プロジェクト」が行われた。９９年以降アルハンゲリスク、レニングラード、ムルマンスク、ヴォログダの諸州もここに参加し、「北の文化」プロジェクト・コンクールを主催するなど、芸術文化支援、人材育成、観光開発など総合的な地域文化復興・発展の運動体となっている[18]。

北ロシアはまた、ユーラシアに広がる「ロシア北部」地帯の先進的部分として、この一帯の諸問題を考える機能も果たしている。サンクト・ペテルブルグやペトロザヴォーツクには、北方の環境保全、少数民族保護[19]、資源開発などに関わる複数の研究センターや運動

---

[17] Dmitrii Likhachev, Russkii sever. Predislovie k knige Ksenii Gemp <Skaz o Belomor'e>. Arkhangel'sk, 1983. p.7.

[18] cf. http://www.soros.karelia.ru/North/progr.html

[19] ロシア北部には約３０の少数民族がいて、その人口は約２０万、ロシア連邦人口の 1.7%を占めるという。「北ロシア」にもカレリア人、コミ人などフィン・ウゴル語族がいる。

体があり、シベリアや極東の同種組織と連携して、北の生活の問題に取り組んでいる。

ロシア北部と呼ばれる地域の面積は約２億平方キロ、ロシア連邦の６４％を占めるのに対して、人口は約１２００万で全連邦の８％[20]。州など地方構成主体の数は２８で、これは全ロシアの約３分の１にあたる。ロシアのこの地域への進出はシベリア征服史と重なっており、イワン雷帝時代の１６世紀、毛皮を求める商人ストローガノフ家とコサックのエルマークによるシベリア汗国制圧に始まって、１７４１年カムチャツカのペトロパーヴロフスク建設をもって一応完結する。以降２０世紀にかけて、この地の豊かな資源と地政学的価値の活用のため、探検、開発、入植、そして中国や日本との対抗の歴史が続いてきた。

バルト海岸から太平洋まで連なるロシア北部の広大な空間は現在でも様々な可能性で人を魅了するが、政治会派ヤーブロコのメンバーでロシア連邦議会北部・極東問題委員会議長のＢ．ミスニクは、その重要性を次のように整理している。１）将来の世代の居住空間として、２）石油、天然ガス、北氷洋の炭化水素など鉱物資源の宝庫として[21]、３）木材、魚、毛皮、トナカイ肉などの供給地として、４）ロシアの海洋戦略拠点として、５）物流のためのいわゆる「北洋航路」の拠点として、６）基礎科学や応用科学のための極地研究の場として、７）北方諸民族の生活圏として。ミスニクによればロシア北部はすでに連邦税収の４分の１，外貨収入の６０％に関わっているが、しかし現在の経済環境下でその産業は軒並み落ち込み、住民はこの地を離れようとしている[22]。こうした情勢をうけて、生活条件の厳しいこの地に暖房や食糧供給を保証し、特別税制や予算措置を含む環境整備をしながら、「北国ロシア」全体の発展に結びつけようというのがミスニクおよび政治集団ヤーブロコの主張である[23]。

ミニスクの数々の指摘のうちでも、とりわけ「北洋航路」のテーマは、ロシアの北の将来を考えるうえできわめて興味深い。北極圏の氷の海を西から東へ縦断する試みは、１８７８－７９年にスウェーデンの鉱物学者ニルス・ノルデンシェルド(1832-1901)が途中の越冬を経て成功し、スターリン時代の１９３２年にソ連の地質学者オットー・シュミットの探検隊が初めて１航海で成功させた[24]。ソ連は砕氷船などの技術開発とともにこの航路の軍事的・経済的利用に力を注いできたが、国際利用に関しては６０年代初頭の米ソ関係軟化の一時期をのぞき、まったく進展しなかった。それが１９８７年のゴルバチョフの国際協力呼びかけを経て、９３年からノルウェー、ロシア、日本の協力で国際北洋航路プログラム(INSROP)が発足、国際資本の代表を加えて開発を検討している。

北洋航路のメリットは、１）ヨーロッパ－アジア航路が大幅に短縮され[25]、２）豊かな

---

[20] 本稿の中心とした「北ロシア」のうちムルマンスク州、カレリア共和国、アルハンゲリスク州の北方３地方構成主体の人口は約２５０万である。

[21] この地域の石油、天然ガスの総量は１千億トンで、世界の埋蔵量の７分の１といわれる。もちろんこの地方は金など非鉄金属の産地でもあり、豊かな水資源も注目されてきた。

[22] ２０１０年には２００万の住民がロシア北部を離れるだろうとミスニクは予測する。

[23] B. Misnik, “Rossiia – velikaia severnaia strana (noiabr’ 1999: Internet version), http://www.yabloko.ru/Publ/Brosheres/rus-sever.html

[24] １９３３年にはムルマンスク－ウラジヴォストーク航路に挑戦して氷に閉ざされた「チェリュースキン隊」をソ連の飛行士たちが救出するという英雄的ドラマがあった。

[25] この航路の本体であるバレンツ海の東出口カールスキエ・ヴァロータからチュコト半島のプロヴィデーニアまでは３０２３海里、ドイツのハンブルグから横浜までは６６００海里（現在のスエズ運河経由では１１４００海里）。

ロシア北部の鉱物資源を陸路やパイプラインよりも効率よく、安全にヨーロッパやアジアへ運ぶことができる、という点につきる。もちろんこれにはインフラ整備、技術開発、ロシアの法や税制の整備、安全保障、人的資源の開発など課題が山積しているが、北洋航路は北ロシアを含めたロシア北部全域を結ぶだけでなく、ロシアの北を介して世界をつなぐ道としての可能性を秘めているのである[26]。

６　北国ロシア

前出のミスニクはみずからのロシア北部開発案に「ロシアはおおいなる北国」というタイトルを与えている。彼の認識によれば、黒海を取り巻くウクライナやコーカサス諸国および中央アジア諸国といった旧ソ連邦南部地域が全て外国となったいま、ロシアは改めて北国の自覚を持ち、北を見つめることから歩み始めるべきである[27]。ただし彼の言う北とは、すでにロシア文化のふるさととしての北ロシアだけでなく、ユーラシア北域と極地の海までを含んだ広大なロシア北部だったわけだ。

思えばロシアは独特な方位感覚のうちに生きてきた[28]。中世以降の歴史において、ロシアは常に東西のベクトル上にみずからの位置をさがしてきた。言い換えれば西のヨーロッパに対する関係において、みずからの位置をさがしてきたと言える。いち早く文明化した西の世界に自己を対置するとすれば、「東の国」を名乗るしかないはずだが、皮肉なことにロシアは積極的な意味で東へのアイデンティティを持てた試しがない。ヨーロッパから見て東なるもの、トルコや東洋、アジアは、ロシアにとっても異質な世界だった。たとえば１３世紀のモンゴルによる支配を、ロシアはみずからを犠牲にして西欧をアジア蛮族の手から守った出来事と正当化したし、より近代のいわゆる「東方問題」においては東のトルコと戦うキリスト教徒南スラブ人の側に身を置いた。ロシアにとって親しい東とは、コンスタンチノープルの東ローマ帝国であったが、ロシアはそれを東の方位感覚に結びつけたわけではなく、ローマ・カトリックに対立するギリシャ正教（東方正教）の空間と捉えたのである（実際この国を含め、ヨーロッパの東はロシアにとって南でしかなかった）。東ローマの滅亡の後、ロシアは東を名乗るどころか「第３のローマ」を自称しようとした。１９世紀の文化的アイデンティティ論で西欧派に対抗したグループも、東洋派やアジア派ではなく、スラブ派という方位を持たない名称を名乗ったのであった。すなわち彼らのアイデンティティのベクトル上には、奇妙な「対西」「非西」「親西」「反西」の位置があるがあるだけで、西や東自体はその彼岸にしかなかったのである。ロシアの東漸とは、この「非西かつ非東」空間の途方もない拡大であった。

東西の対立軸がいかにも文明論的で人為的な産物であったのに対して、北と南のベクトルには気候、風土、地形、景観といった具体的要素と、それに対する感情を伴っていた。北欧の詩人たちと同様、ロシアの詩人も南と北のテーマを歌った。その際しばしば歌われ

---

[26] V.M.Pazovskii, Severnyi morskoi put': otsenki zarubezhnykh spetsialistov (Internet version), http://econom.nsc.ru/eco/ARHIV/ReadStatiy/08_01/pazovsk.html

[27] 例えばソ連時代の最南の都市、トゥルクメニスタンのクシキが北緯３６度だったのに対し、現ロシアの南端と見られるコーカサスのクラスノダールは北緯４５度である。

[28] ロシアの歴史的方位感覚については、川端香男里『ロシア　その民族とこころ』（悠思社、1991）を参照。

たのは、南へのあこがれと北への郷愁という両義的な感情であった。

「でも再び私はあなた（南）と別れ／再び私は北に誘われた・・・・・・／再び私の頭上に下りてくる／北の鉛色の天蓋が・・・・・・／ここでは空気が肌を刺し／あたりは雪だらけ／高みにも深みにも／寒気という全能の魔法使いが／ただひとりこの地を取り仕切る／／だがしかし、この吹雪の王国の彼方／地の果てのその向こう／黄金色の明るい南方に／私はいまだあなたを遠望できる／あなたは輝く、ひとしお美しく／ひとしお瑠璃色にみずみずしく／そしてその言葉はひとしお響きよく／私の心に響いてくる」（フョードル・チュッチェフ：1837）[29]

プーシキンやレールモントフらの詩人が描いた定型によれば、南はロマンチックでエキゾチックな恋と冒険の地であり、北は内省と成熟の場所だった。だが南北の対立において決定的な要因は、南の拡散、輪郭の曖昧さと、北の単純さであろう。ロシア人は南ロシア、ウクライナ、コーカサスといったみずからの内の（あるいは隣接した）南を持っていた。しかしながら南はいつも彼らにとって果てしない、底の抜けた方向だったようだ。南にあこがれる者はしばしば南部ロシアに自足できず、いつしか黒海からエジプト、イタリア、インドといった異境の地へと流れていく。あるいは暖かい海を求めて「南を制圧しよう」といった物騒な野心を抱いてきたのだ。もちろんこの地域にはオスマントルコ、クリミア・タタール、グルジア、アルメニア、コーカサス諸民族やコサックといった成熟した異文化勢力群がいて、ロシア南辺の政治情勢を絶えず熱くしていた。ロシアは西向きに発揮できなかった大国意識を南に向けた結果、ここでもイギリスやフランスとぶつかることになる。つまりロシアにとって南もまた、複雑で落ち着きの悪い方位であった。

そうした不安定・不定形な南に比べたとき、北はその存在の具体的な輪郭で際立っていた。それは森であり道であり雪であり都市であり、そしてそれ以上行き場のない氷の川や海であった。それは茫漠たる平原の放浪者を受け入れる森の場所、「寒気という全能の魔法使い」が外敵を寄せ付けぬ安全空間、無愛想な灰色の空と純白の雪でいつもかわらず迎えてくれる、懐かしい我が家だった。北のイメージは戦争よりも、農業、狩猟、漁労の日常と深く結びついている。つまり北は、生活のリズミカルな反復のうちに人間の世界観が凝縮され、確かな形を晒す場所だった。

ロシアの東漸が「北」をウラルの東側に拡大していったとき、もちろんそこには様々な闘いや異民族との出会いが経験されたのだが、面白いことにそうしたことは北向きの出来事としては意識されていないようだ。つまりピョートル大帝が西北部でスウェーデンを相手に行った北方戦争をのぞいて、ロシアの北進は外部勢力との闘いではなく、もっぱら自然との闘い、資源開発や居住空間の拡大として意識されてきた。北はロシアにとってただ一つ、みずからの内側で完結する方位だったのである。東国とも南国とも（もちろん西国とも）決して名乗りえないロシアが、唯一自信を持って名乗ることのできるのが「北国」の名であった。

このように「北国ロシア」のアイデンティティは、ヨーロッパ部の「北ロシア」に発し

---

[29] １９世紀の詩人・外交官チュッチェフの場合、「寒気という全能の魔法使い」のいる場所は首都ペテルブルグであった。

てロシア国家の東漸とともに「ロシア北部」として拡大する一方で、「北の都」ペテルブルグというトポスを得て近代に展開してきた。いま北ロシア文化の記憶に自己同一化しようとする農村派作家も、北の首都ペテルブルグ３００周年を祝う人々も、北シベリアの資源開発や民族と環境の問題を語る人々も、おそらくそれぞれの北イメージを核にしたロシア国家の未来像を抱いている。ロシアの北を通ってヨーロッパとアジアをつなぐという北洋航路の企図も、極地の海を挟んでロシアがアメリカやヨーロッパと対峙・連携するという北極文明圏の思想も、そうした文脈でリアリティをもつだろう。北国という伝統的イメージに生気を吹き込むことから、様々な自己表現の言葉と手法を持った、新しいロシア像が模索されているのだ。